

使徒の働き24章 「神の前と人の前の良心」

1A 言葉なめらかな弁護士 1-9

1B へつらい 1-3

2B 証拠なき訴え 4-9

2A 良心に基づく弁明 10-21

1B 平和の中での宣教 10-13

2B この道による奉仕 14-16

3B 同胞への施しと献げ物 17-21

3A 延期という打算 22-27

1B 総督として 22-23

2B 神の前で 24-27

本文

使徒の働き 24 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは前回で 23 章まで来ました。今朝は 24 章を一節ずつ見ていきたいと思います。説教題は、「神との前と人の前の良心」です。パウロが今、ローマ総督の前で弁明することになります。これまで私たちは、ユダヤ人たちの前でパウロが弁明したのを見ました。神殿にいる彼らに、いかにイエス様に出会ったかを話しました。そして次に、最高法院において宗教指導者たちの前で弁明しました。けれども、どちらも身の危険を感じるほどの反発があり、それでローマの千人隊長がパウロに護衛を付けて、総督にいるカイサリアに連れて行ったのです。イエス様が、弟子たちに言われました。「ルカ 21:12b-13・・・わたしの名のために王たちや総督たちの前に引き渡します。それは、あなたがたにとって証しをする機会となります。」ローマ総督フェリクスの前で証しの機会が、与えられました。その時に、パウロがいかに、自分に与えられた良心に基づき弁明をし、また証しを力強く立てているのかを見ていきます。私たちもそのように、神の前に、また人の前にしっかりと良心を保っているか？ということを考えながら読んでいきたいと思います。

1A 言葉なめらかな弁護士 1-9

1B へつらい 1-3

¹ 五日後、大祭司アナニアは、数人の長老たち、およびテルティロという弁護士と一緒に下って来て、パウロを総督に告訴した。

千人隊長のリシアが、大祭司や長老たちに、訴えるなら総督の前で訴えるように命じていました。それで、五日後に大祭司アナニアと長老たちが一緒にやってきます。弁護士を連れて来ていますが、「テルティロ」はありふれた名前です。パウロのようにギリシア語を話すユダヤ人であったと考え

られます。この弁護士のギリシア語には、「雄弁家」を意味する言葉が使われています。言葉の雄弁さによって、総督を印象づけようということです。そもそも、パウロに対する告発はローマの法に触れるようなものではありませんでした。千人隊長もフェリクスに、「彼が訴えられているのは、ユダヤ人の律法に関する問題のためで、死刑や投獄に当たる罪はないことが分かりました。」と手紙の中で伝えています(23:29)。証拠もなく、根拠もないものですから、心象操作によって訴えるしかありません。それで雄弁家を連れてきたのです。

² パウロが呼び出され、テルティロが訴えを述べ始めた。「フェリクス閣下。閣下のおかげで、私たちはすばらしい平和を享受しております。また、閣下のご配慮により、この国に改革が進行しております。³ 私たちは、あらゆる面で、また、いたるところでこのことを認め、心から感謝しております。

総督に対して敬意を示す言葉を始めに述べてから訴えるのですが、これは実にへつらった言い方です。「すばらしい平和」と言っていますが、後で詳しくフェリクスのことを紹介しますが、彼の治世は非常に無慈悲であったと言われています。大祭司を強盗に襲わせて殺したこともあります。彼の残虐な仕打ちが、その後のユダヤ人反乱を引き起こしたのではないかとされているほどです。ですから、確かに秩序は保たれていますが、力によって押し付けられた平和です。しかし、テルティロがこんなことを言っているのは、フェリクスにへつらっていることであり、また、次にパウロがいかに騒動を起こしているかを印象付けさせるためです。「あなたのおかげですばらしい平和が享受できているのに、パウロという男が騒ぎを起こしている。」ということです。

2B 証拠なき訴え 4-9

⁴ さて、これ以上ご迷惑をおかけしないために、私たちが手短かに申し上げることを、ご寛容をもってお聞きくださるようお願いいたします。⁵ 実は、この男はまるで疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者であり、ナザレ人の一派の首謀者であります。⁶ この男は宮さえも汚そうとしましたので、私たちは彼を捕らえました。⁸ 閣下ご自身で彼をお調べくだされば、私たちが彼を訴えております事柄のすべてについて、よくお分かりいただけます。」⁹ ユダヤ人たちはこの訴えに同調し、そのとおりだと主張した。

三つの訴えをしています。ローマ総督に訴えているので、ローマ法に触れるようなこと、政治的なことに焦点を合わせています、一つは、騒ぎを起こしていることです。「まるで疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている」とあります。しかし、ユダヤ人たちが信じないので、騒ぎを彼らが起こしており、パウロが起こしているわけではありません。次に、異端であるということです。「ナザレ人の一派の首謀者であります」と言っています。ローマにおいて、ユダヤ教は公認でありました。けれども、パウロはユダヤ教に当てはまらない異端、ナザレ人の一派の首謀者なのだということです。そして三つ目が、「宮さえも汚そうとし」たということです。ローマにおいて、多神教にしろ、一神教にしろ、神殿を汚すような行為は厳しい処罰を受けました。けれども、パウロ

が後で弁明しますが、そんなことはやっていません。ともかく、この三つについて訴えています。

それから、7 節が抜けていますね。これは下に引照のところに説明があります。「そして私たちが彼を自分たちの律法によってさばこうとしたところ、⁷ 千人隊長リシアがやって来て、力づくで彼を私たちから奪い、⁸ 彼を訴える者たちに、あなたの前に来るようにと命じました。」これは、自分たちを印象付けるためによく言っていますが、彼らは激しい議論になり、ルシアが入り込まなければパウロは引き裂かれて殺されてしまうかもしれなかったからです。

2A 良心に基づく弁明 10-21

ティルティオのこの訴えに対して、パウロが弁明します。とても対照的です。

1B 平和の中での宣教 10-13

¹⁰ そのとき、総督がパウロに話すよう合図したので、パウロは次のように答えた。「閣下が長年、この民の裁判をつかさどってこられたことを存じておりますので、喜んで私自身のことを弁明いたします。

これは、へつらいではなく敬意です。事実、ユダヤ人のことをこの時点で5年、裁判でつかさどっていたことは確かです。私たちはすべての人を敬いなさい、王を敬いなさいと命じられています。

¹¹ お調べになれば分かることですが、私が礼拝のためにエルサレムに上ってから、まだ十二日しかたっていません。¹² そして、宮でも会堂でも町の中でも、私がだれかと論争したり、群衆を扇動したりするのを見た者はいません。¹³ また、今私を訴えていることについて、彼らは閣下に証明できないはずで

パウロは、騒ぎを起こしているという訴えに対して弁明しています。具体的にエルサレムに上ったからの自分の行動について証言しています。まず、エルサレムでは礼拝するために来たということ。だから、論争したり、扇動したりすることはしていないということです。パウロは証しを立てて、それでユダヤ人たちが騒動を起こしましたが、けれども、パウロ自身が争いをけしかけたことはありません。

敢えて人に怒りを買うようにけしかけるような伝道、宣教をする人々がいます。けれども、それは正しくありません。パウロは、「ロマ 12:18 自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。」と勧めました。そして、ペテロはこう言っています。「3:15b-16a あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでも、いつでも弁明できる用意をいなさい。ただし、柔和な心で、恐れつつ、健全な良心をもって弁明しなさい。」

2B この道による奉仕 14-16

14 ただ、私は閣下の前で、次のことは認めます。私は、彼らが分派と呼んでいるこの道にしたがって、私たちの先祖の神に仕えています。私は、律法にかなうことと、預言者たちの書に書かれていることを、すべて信じています。

パウロは、ティルティオの二つ目の訴え、分派であるということについて、そのまま認めています。当時、キリスト教というのではなく「この道」と呼ばれていました。イエスこそが道であるということで、この道と呼ばれていたのです。彼は、イエス様の証しについてのことは、決して弁解がましくなることなく、そのまま大胆に伝えていきました。私たちは福音ではないことについて、不必要な争いを引き起こさないようにしないといけませんが、福音についてのことは弁解がましくなってはいけません。そのままを、与えられた良心に従って伝えるのです。

そしてパウロは、彼らが分派であるとか、異端であるとか言っているけれども、まさに彼らの宗教で信じられていることを自分も真っ直ぐに信じていることを述べています。「私たちの先祖の神に仕えてい」と言って、律法と預言者をすべて信じていると言っています。私たちも、聖書に言っていることをすべて信じていると言う、その真っ直ぐな信仰が必要です。

15 また私は、正しい者も正しくない者も復活するという、この人たち自身も抱いている望みを、神に対して抱えています。

パウロは、この弁明を証しの機会としました。イエスがよみがえられたことを宣べ伝えるための機会としました。そのために、まずはっきりとさせたのが、死者からの復活です。パリサイ派は堅く信じていました。ダニエル書 12 章 2 節にこうあります、「ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。」イエス様も、このダニエルの預言を踏まえて、ご自分の声によって人々がよみがえると語られました。「ヨハ 5:28-29 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。29 そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。」

パウロがここで、「正しい者も正しくない者も復活する」と言っていますね。それは、神の最終的な裁きを受けるために復活するということです。黙示録では、時間的に信じる者がよみがえるのは、千年間のキリストの統治の前、第一の復活と呼び、不信者の復活は千年期が終ってからの復活になりますが、神が報いを与える時、清算の時のためによみがえらせることを語っています。どんな不義や不正が行われていたとしても、隠れた義の行いがあったとしても、すべてが明らかにされ、真っ直ぐにされる時がきます。そして、それは全ての人をよみがえらせることによってもたらします。

¹⁶ そのために、私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、最善を尽くしています。

ここです、パウロが弁明をし、また証しをしている時の動機がここににあります。神の前にも、責められるところのないように最善を尽くします。人の前にも責められるところのないように生きます。英語ですと、それをアカウンタビリティーと呼びます。まず、自分が神の前ですべてがさらけ出されていることを知っている、ということです。「ヘブル 4:13 神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」そして人々の前でも、彼らが、確かにパウロが立てられている奉仕者であることを認めるような形で生きて行かないといけないことを知っていました。「Ⅱコリ 4:2 かえって、恥となるような隠し事を捨て、ずる賢い歩みをせず、神のこぼを曲げず、真理を明らかにすることで、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。」

3B 同胞への施しと献げ物 17-21

¹⁷ さて私は、同胞に対して施しをするために、またささげ物をするために、何年ぶりかで帰って来ました。

パウロは今ここで、三つ目の訴え、宮を汚しているということに対して弁明しています。彼は、同胞のユダヤ人たちのために施しをし、献げ物を神殿でするために帰ってきました。確かにパウロはこの二つを行いました。これは、ユダヤ教徒であれば正しい行いとみなされるものです。

¹⁸ そのささげ物をし、私は清めを済ませて宮の中にいるのを見られたのですが、別に群衆もおらず、騒ぎもありませんでした。¹⁹ ただ、アジアから来たユダヤ人が数人いました。もしその人たちに、私に対して何か非難したいことがあるなら、彼らが閣下の前に来て訴えるべきだったのです。

そうです、あの騒動がおこったのは、アジアから来た数名のユダヤ人たちによってであります。ですから、証人といったら彼らが来るべきなのです。ところが、ここにいない。イエス様も、ユダヤ人たちの裁判において、同じことを語られましたね。「ヨハ 18:20 わたしは世に対して公然と話しました。いつでも、ユダヤ人がみな集まる会堂や宮で教えました。何も隠れて話してはいません。21 なぜ、わたしに尋ねるのですか。わたしが人々に何を話したかは、それを聞いた人たちに尋ねなさい。その人たちなら、わたしが話したことを知っています。」

²⁰ そうでなければ、ここにいる人たちが、最高法院の前に立っていたときの私に、どんな不正を見つけたのかを言うべきです。²¹ 私は彼らの中に立って、ただ一言、『死者の復活のことで、私は今日あなたがたの前でさばかれている』と叫んだにすぎません。」

彼らが訴えるなら、最高法院でパウロが何か不法なことをしたかを話せばよいのに、私はただ、死者の復活のことで裁かれていると叫んだだけだ、としています。こうやって、彼は良心をもって神の前でも人の前でも責められることなく行い、また証しをしっかりと立てています。

3A 延期という打算 22-27

1B 総督として 22-23

²² フェリクスは、この道についてかなり詳しく知っていたので、「千人隊長リシアが下って来たら、おまえたちの事件に判決を下すことにする」と言って、裁判を延期した。²³ そして百人隊長に、パウロを監禁するように、しかし、ある程度の自由を与え、仲間の者たちが彼の世話をするのを妨げないように、と命じた。

死者の復活のことを聞いたら、全くの世的な人であれば、何かおかしくなったと思ったに違いありません。26章では、後任の総督フェストゥスが「26:24 パウロよ、おまえは頭がおかしくなっている。博学がおまえを狂わせている。」と叫びました。けれども、フェリクスは、「この道についてかなり詳しく知っていた」のです。それで、彼には下心がありました。パウロを監禁したままにしておきたいと言う思いが働きました。

ここには、いろいろな思惑があります。一つは今、話しましたように、彼はこの道についてもっと聞きたいということがあります。これは良い動機のように見えますが、実はそうでもありません。これから説明します。次に読むと分かりますが、パウロからお金をもらいたい、賄賂を得たいと言う下心がありました。

そして三つ目に、ユダヤ人たちの機嫌を取ろうとしていました。ユダヤ人に対して過酷な弾圧をしていましたが、ここで機嫌を良くしてもらって、自分のことがローマ本部、皇帝のところに訴えられないようにしようと思ったのです。カイサリアのローマ総督は、どうやってユダヤ人を治めるべきか苦心していました。多神教のローマが一神教のユダヤ教を治めているので、衝突が絶えなかったです。けれども、騒動や混乱、争いが起これば、きちんと統治していないということで皇帝に罷免させられる、ひどければ罰を受けるかもしれないのです。

それでフェリクスは、「延期」という決断を下したのです。これがフェリクスの特徴でした。パウロが、神の前でも人の前でも責められるところのないように、公然と生きていたのに対して、フェリクスはいつまでも隠し事をして決めるべきことを決めない、責任を取らなかったのです。決断しないというのは、一つの大きな決断という言い方があります。フェリクスは、パウロを不当に長期間、監禁したのです。その決断を下していたのです。多くの人が決断をしないことで、責めを受けなくてすむと思っていますが、いいえ、すでに決断をしているのですから責めを受けます。

しかし、このことも神は用いられています。パウロはローマ市民ですから、ある程度の自由が与えられていました。「仲間の者たちが彼の世話をするのを妨げないように、と命じた」とあります。したがって、カイサリアに住んでいるピリポなど、いろいろな兄弟が訪れたことでしょう。また、著者ルカは、この間にいろいろ調べて、ルカによる福音書を書き記す準備ができたかもしれません。私たちは、何もできていない間、実は何かしている時にはできていないことを成し遂げることができます。

2B 神の前で 24-27

²⁴ 数日後、フェリクスはユダヤ人である妻ドルシラとともにやって来て、パウロを呼び出し、キリスト・イエスに対する信仰について話を聞いた。

実はフェリクスは、イエス・キリストに対する信仰について関心がありました。けれども、今から読めば分かりますが、その関心が正しい関心ではありませんでした。妻がユダヤ人でドルシラであるとあります。ここで聖書以外の文献にある、フェリクスとドルシラについて見ていく必要があります。

フェリクスは、解放奴隷でした。総督まで出世した解放奴隷は、フェリクスだけでした。兄パルラスが皇帝ネロの親友で、弟のために執り成してくれたのです。しかし、心はそのまま奴隷のようであったようです。ローマの歴史家タキトゥスは、「奴隷の根性で王の権力をふるった」と言いました。先ほど言及しましたように、無慈悲に人々を殺していきました。

また、歴史家ヨセフスは、彼が非常に腐敗していたことを書いています。次々と王女と結婚しました。最初の王女の名は分かっていませんが、二番目の妻は、アントニウスとクレオパトラの孫娘です。三番目が、ヘロデ大王の曾孫ドルシラです。ドルシラは、バプテスマのヨハネを殺したヘロデ・アンティパスの孫娘で、ヨハネの兄弟のほうのヤコブを殺させた、ヘロデ・アグリッパ一世の娘です。彼女は、エメサという国の王アジサスの妻でしたが、フェリクスはドルシラを口説き、自分の妻にしたのです。まるでドルシラの祖父ヘロデ・アンティパスとヘロディアのようです。二人は、公然と放縦な生活をしていたそうです。

その二人がキリスト・イエスに対する信仰について話を聞きに来ました。その興味関心が、本当に正しいものかは疑わしいです。ドルシラの祖父ヘロデも、総督ピラトからイエス様が送られてきた時に非常に喜んでいました。「ルカ 23:8 ヘロデはイエスを見ると、非常に喜んだ。イエスのことを聞いていて、ずっと前から会いたいと思い、またイエスが行うしるしを何か見たいと望んでいたからである。」二人はおそらく、知的的好奇心であったのでしょうか。知識的に、この道、イエスを信ずる道というのはどういうものか強い関心があったのかもしれませんが。数多くの人が、知的には聖書について知りたいと願います。しかし、それが正しい探求とは限らないのです。

²⁵ しかし、パウロが正義と節制と来たるべきさばきについて論じたので、フェリクスは恐ろしくなり、

「今は帰ってよい。折を見て、また呼ぶことにする」と言った。

パウロは、ここでも神の前における良心に基づいて語っています。正義と節制と来るべき裁きについて論じました。先に死者のよみがえりについて語りましたが、その時に神の裁き、報いがあります。これらの知識は、知的な欲求を満たすものではなく、自分自身の行い、そしてその後の報いについてのことであり、具体的であり、自分の行いを改めるようなことなのです。

ところで、パウロは論じました。イエス・キリストを信じることについて論じました。イザヤは、「1:18 さあ、来たれ。論じ合おう。——【主】は言われる——たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」と預言しました。神は、私たちが罪を犯しても、キリストの流された血によって清め、赦してくださいとおっしゃいます。この方に信頼し、悔い改めて神に立ち返るならば、確かに罪が真っ赤であっても真っ白にしてくださいのです。

けれども、それでも人は罪の中に生きようとします。理にかなわないことを行なってしまうのです。罪の中に生きていれば、自分を滅ぼしてしまうことを知っているのに、それでもやめません。けれども、自分のしていることには必ず報いがあるのです。「ロマ 2:4-6 それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。5 あなたは、頑なで悔い改める心がないために、神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えています。6 神は、一人ひとり、その人の行いに応じて報いられます。」このように、罪を悔い改めて神に立ち返らなければ、その報いは必ずあり、免れることはできないのです。

パウロは、まず「正義」について論じました。神とキリストについて関心があるなら、まずこの方が正しい方であることを知らないといけません。神が正しい方、真っ直ぐな方であり、神と交わりを持つ、神を知っているというならば、自分も正しく生きるように求められています。「1ヨハ 3:7 義を行う者は、キリストが正しい方であるように、正しい人です。」ところが、神のことを知りたいと願っていたフェリクスとドルシラは、公然と神の律法を無視した生き方をしていました。そして次に、「節制」について論じました。これは、自制するということです。自分の肉体に与えられた欲求を、御霊によって制御することです。禁じる、なくするというのではなく、神の御心の中で用いるということです。しかし、フェリクスとドルシアは全く不節制な生活をしていました。そしてその行き着くところには、神の裁きがあるということ。これをパウロは論じました。必ず清算する時が来ます。「伝 12:13-14 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。14 神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからである。」

だからこそ、論じ合おうではないかと主は言われます。その罪が真っ赤であっても、主はキリストの流された血によって真っ白にするのだ。わたしのところに来なさい。そして罪を洗い流しなさい、と呼びかけているのです。

ところが、「フェリクスは恐ろしくなり、「今は帰ってよい。折を見て、また呼ぶことにする」と言った。」とあります。フェリクスは、自分の行っていることによって、主の裁きが近づいていることを知って恐れたのです。ところが、そこで神の愛を知ること多くの人が拒むのです。神が罪に対する怒りを、ご自分の独り子キリストに満ちし、それによって、私たちと和解しようとしておられるのです。御子に罪を置き、そこまでしてご自分のところに来るように道備えをしておられるのです。神は恐ろしい方ですが、しかし憐れみ豊かな方なのです。それを知ろうとせず、フェリクスと同じように「今は帰ってよい」と言ってしまふのです。「もう結構です」と言ってしまふのです。

そしてフェリクスは、「折を見て、また呼ぶことにする」としました。総督としてパウロの無罪判決を下すのを延期しただけでなく、自分が悔い改めてイエスを信じることも延期したのです。どんなに多く人が、折を見てまた聞くことにしているのでしょうか？自分の仕事が落ち着いてからクリスチャンになるかどうか考えてみる、という人には何人にも会いました。すごい若い子に出会ったことがあります。大学生ですからまだ時間がたっぷりありますが、「仕事をしてからそれでもクリスチャン生活ができるかどうか分からないから、とりあえず仕事をしてから信じるかどうかを考えてみる。」と言いました。時間がたっぷりある時に決断を延期するなら、ない時に延期しないですぐ決められるわけがないのです。パウロは言いました、「Ⅱコリ 6:2 神は言われます。「恵みの時に、わたしはあなたに答え、救いの日に、あなたを助ける。」見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。」そしてイザヤも預言しました、「55:6-7 【主】を求めよ、お会いできる間に。呼び求めよ、近くにおられるうちに。7 悪しき者は自分の道を、不法者は自分のはかりごとを捨て去れ。【主】に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してく下さるから。」

²⁶ また同時に、フェリクスにはパウロから金をもらいたい下心があったので、何度もパウロを呼び出して語り合った。

当時、総督などが囚人からわいろを受け取ることは隠れて行っていたことでした。こうやって、フェリクスは全く神を恐れることなく、福音宣教師であるパウロさえ利用しようとしたのです。

²⁷ 二年が過ぎ、ポルキウス・フェストゥスがフェリクスの後任になった。しかし、フェリクスはユダヤ人たちの機嫌を取ろうとして、パウロを監禁したままにしておいた。

フェリクスの隠れた動機によって、裁判の延期によってパウロは二年も牢に在るままにされていました。しかし、最も悲惨なのはフェリクス自身です。「折を見て」と言いましたが、その折は二度と

来なかったのです。フェストゥスが後任となったとありますが、それはフェリクスが罷免させられたからです。カイサリアでユダヤ人とギリシア人の対立があったのですが、その時に多くのユダヤ人を虐殺したそうです。それでユダヤ人指導者がローマに直訴しました。兄のバルラスが執り成したので、かろうじて首はつながっていましたが、罷免させられました。そしてドルシラは、フェリクスとの間に生まれた子と共に、山の噴火で死ぬこととなります。いつまでも、救われる機会が提供されているわけではないのです。

神は、今にでもこれまでの罪をすべて帳消しにすべく、憐れみを注ごうとされています。ただ、立ち返ってください。そして罪を拭っていただくようにしてください。イエスは、あなたの罪のすべてを取り除くために来てくださったのです。そして、神の前に、人の前に責めのない良心を持ちましょう。

今回は、後任のフェストゥスの前でのパウロの弁明を読みます。